今月の窓

「神の手」の破壊するもの

４月初旬，中国共産党中央農村工作領導小組弁公室主任である陳錫文氏のわが国農村視察に同行し，四国，愛媛を訪問した。実質的に中国農業・農村政策立案の最高責任者である彼は，「知的エリート」といったタイプとも，「こわもての政治家」といったタイプともほど遠い。むしろ，「農民」ともいえる風貌と手を持つ彼が，ときおり静かに語る言葉が何故か強く心に響く。それが何故なのかを同行期間中ずっと考えていたが，帰京する間近になってやっとその理由に気づいた。それは，中国農村政策立案の最高責任者という高い立場にありながら(いやむしろあるからこそと言うべきか)，彼の農業・農村を見る視点が，決して上から全体を見下ろすものではなく，常に農民の視線に立ち，それを堅持しているということである。若き日の「下放」経験により，黒龍江省の貧しい農村での生活を余儀なくされたことも，その視線に影響を与えているのかもしれない。

上からの視点で政策を発想した場合，「市場メカニズムの活用」ほどに魅力的で都合のよいものはない。何も深刻に思い悩む必要はない。見えざる「神の手」が自動的に世界をかき回し，それが静まった後には極めて効率的な世界が実現されているのである。高い視点から見下ろしていれば，神の手がかき回す地上で何が行われているか，それが何を破壊しているのかは良く見えない。しかし，いざ地上の視点に立ち，神の手が現実の農村・農民に何をもたらすかを真剣に考えた時，そうした安易な政策をとることには慎重にならざるを得ない。

陳錫文氏は，市場メカニズムの活用による農村の「構造改革」が農民に何をもたらすか，農村を追われた労働力が都市に流入した時に都市で何が生ずるかをしばしば熱く語った。盛んにもてはやされる沿海州の発展など，広大な中国の農村から流出する労働力を吸収するには，遥かほど遠い。仮にいったん農村を追われた労働力が，都市部の不況により都市からも排出され(まさに今日の状況のように)，彼等が帰るべき農村を持たなかった時に，いったい中国で何が起こるのか。陳錫文氏が20年以上にわたり，日本の農業協同組合に注目し，(構造改革の妨げになるとの一部わが国経済学者の忠告にもかかわらず)中国においても農民が自らを護るための組織が必要と主張し続けている背景には，そうした悲惨な状況をどうしても避けなければならないという強い意志があるように思われる。

新自由主義学派の泰斗であるハイエクですら，市場経済のメカニズムを「絶対的価値」として教条的に信奉していたのではない。彼は，特定の人間による人為的な介入，計画経済が市場経済に勝るものではないこと，つまり人為的介入，計画経済との「相対的」評価として市場の優位性を主張したにすぎない。中国の農業，農村改革には，そうした教条的な市場化でも，計画経済でもない，新たな道が必要なのであろう。

農民を護るしっかりとしたセーフティネットと合理化へのインセンティブは，ともに不可欠なものである。たとえ長い時間がかかろうとも，そうしたセーフティネットと合理化へのインセンティブが相互に影響し，時に対立し，まさに「弁証法」的に解決されていく以外の道は無いように思われる。

（(株)農林中金総合研究所　取締役基礎研究部長　原　弘平・はらこうへい）